

## 《論 説》

## 都市ローマとイタリアの支配階層

—— 友誼・血縁関係とその重要性 ——\*

ジョン・R・パターソン

(藤 井 崇 訳)

ヴァレリウス・マクシムスとプルタルコスの伝えるところによれば、前91年、両親を亡くした幼いカトは、おじで護民官のM. リウィウス・ドルゥススの邸宅に身を寄せていた。後に同盟市戦争で反乱指導者となるQ. ポッパエディウス・シロは、このドルゥススの邸宅に数日の間滞在した。彼は、ローマのイタリア同盟者の地位について、ドルゥススと話し合いを持とうとしたのである。そこでポッパエディウスは、当時4才であった幼いカトに、イタリア人のためにおじドルゥススに口利きをして、自身が推進するローマ市民権獲得運動をサポートするよう仕向けてはくれないか、と頼んでいる。しかし、カトが返答を拒むと、ポッパエディウスは高い窓からカトを突き出し、揺さぶり続けながら、言うことを聞かないと突き落とすぞと脅したのである。それでもカトはポッパエディウスの要求を断り続けたので、ポッパエディウスは彼を室内に戻した。そして、プルタルコスによれば、ポッパエディウスは友人にたいして、静かに語ったと伝えられている。「カトが少年であることは、イタリアにとってどれほどの幸運であろうか。もし彼が大人で〔もし元老院議員でも〕あったならば、民会において、われわれはただの一票も持つことはできないだろう」と<sup>1)</sup>。

もちろんこの話の主題は、幼い頃よりのカトの勇敢さと意志の強さであるが、同時にこの伝承は、同盟市戦争前夜の時代を、複数の互いに関連した視点から理解するのに役立つ。まず、ハイレベルの政治会談の舞台として、ローマ貴族の邸宅の重要性が浮かび上がる。この点は、ウイトルウィウスによっても強調されている。彼は、公的な集会や私的な裁定がしばしばそのような邸宅でおこなわれていることを指摘し、邸宅はそれにあわせて適切に設計される必要があるとしている<sup>2)</sup>。貴族の邸宅でおこなわれるこの種の会合は、ローマの国内政治と同じく、外交問題にも関係し得たのである。ウェッレイウスによれば、このリウィウス・ドルゥススは、屋内ですることすべてが外からみえる邸宅を建てるよう、自身の建築家に依頼したと伝えられている。彼は、結局は、この家、もしくはそのすぐ外で暗殺されることになる<sup>3)</sup>。伝承の第二の留意点は、ヴァレリウスの執筆時期が、上記の出来事のたった1世紀後のことであるにもかかわらず、彼がラテン人と同盟者の区分に混

乱を来しているということである。ポッパエディウスは、ウァレリウスが示唆するようなラテン植民市の出身ではなく、マルシ人の長であったことは間違いのない事実である<sup>4)</sup>。しかしながら、この伝承でもっとも興味深いのは、リウィウス・ドルゥスとポッパエディウス・シロとの間に存在する関係の表現のされ方である。ポッパエディウスのことを、ウァレリウス [ラテン語作家] は、ドルゥスのホスぺス、プルタルコス [ギリシア語作家] は、ドルゥスのフィロスと伝えているのである。

本論文は、同盟市戦争以前にローマ人、ラテン人、そしてイタリアのエリート層の間に存在した、友誼・血縁関係やその他の人的つながりを考察することを、その目的としている。この種の人的関係を分析するために、いかなる証拠が残されているのか？この種の人的関係は、ローマ、植民市、そしてイタリア同盟市との間のより幅広いコミュニケーションにたいして、いかなる意義を持っていたのか？手順としては、まず、ホスピティウムが分析される。これは、具体的には、上記のポッパエディウス、リウィウス・ドルゥス、カトに関する伝承によって示されている賓客関係である。続いて、ローマとイタリアの指導者層との間に存在したその他の人的関係を検討し、最後にローマ人とイタリア人の婚姻関係を分析した上で、同盟市戦争前夜におけるローマ・イタリア関係について、可能と思われるいくつかのポイントを論じたい。

## 個人間のホスピティウム

さまざまな共同体の個人間に存在するホスピティウム（ギリシア語でクセニア）の伝統は、古代ギリシアの時代からすでに認められ<sup>5)</sup>、王政期ローマにおける都市間関係を伝えるリウィウスの記述においても、ホスピティウムは繰り返しあらわれるテーマである。リウィウスによれば、セルウィウス・トゥッリウス王はラテン人上層民との間に賓客・友誼関係を結び、タルクィニウス・プリスクス王はこの政策をさらに推し進めたと伝えられている<sup>6)</sup>。パレストリナその他の墓地で発見されているきわめて国際色豊かな副葬品は、アーケイック期中央イタリアの貴族たちが、イタリア半島内外にわたりそのような人的関係を築いていたことを示唆している。それら副葬品が贈与・交換行為の結果であることは、明らかなのである<sup>7)</sup>。

ホスピティウムは、共和政期においても引き続き存続する。ホスピティウムとは、本質的には、異なった共同体に属する、同等の（エリート層の）2個人間の関係であり、この関係は、互いにもてなしをおこない、（もし、それがふさわしい時には）その他の援助を提供する義務を伴っていた。この人的関係は、テッセラ・ホスピタリスとして知られる青銅板の鑄造によって、象徴的に表現されることもあった。テッセラ・ホスピタリスはいくつか発見されているが、そのもっとも印象的な事例は、マルシ人の領域にあるトラサッコ産のものであろう。それは、雄ヒツジの頭部を縦半分に分った形をしており、T. マンリウス

M. f. と T. スタイオディウス N. f. というホスピティウムにある両パートナーの名前が刻まれ、さらに二つの名前の間に、ホスペスという単語が書かれているのである。このマンリウスとは、おそらく前235年と前224年にローマの執政官であった T. マンリウス・トルクアトゥスに同定可能であり、スタイオディウスは、おそらくは、マンリウスのマルシ人側のホスペスであったのであろう<sup>8)</sup>。プラウトゥスの一節は、テッセラ・ホスピタリスのような（二つで一組の）ものが、2 集団間のつながりの証として、一方の側を訪問した際に制作されたことを示唆している<sup>9)</sup>。ホスピティウムは相続可能なものであったが、元々のホスペスの子孫は、お互い直接顔を見知ってはいない可能性もあったため、世代を経た後の当事者にとって、おそらくこの慣習はきわめて有用であっただろう。

ホスピティウムにおいては、宿泊場所の提供は特に重要であったと考えられる。私用公用問わずイタリア中を移動する貴族にとって、街道沿いの不潔な宿屋は、滞在に適さず危険な場所であったであろう。彼らにとっては、信頼がおけ、代々つきあいのある友人の邸宅に宿泊する方がずっとよかったのである。この宿舎提供の慣習に関しては、数多くの文献史料が残されている。例えば、リウイウスによれば、ブルンディシウムの有力者ルキウス・ランミウスによる宿泊提供は、前170年代、ローマの将軍や使節のみならず、ヘレニズム王家の人々をも含めた海外の要人にまで及んでいたと伝えられている。ブルンディシウムは、ギリシアとローマを結ぶ陸海路のきわめて重要な中継地点であったのである。結果として、マケドニア王ペルセウスがランミウスに、滞在中のローマの要人を毒殺するよう説得を試みるという事件までおこっている<sup>10)</sup>。同じようなことはキケロによっても伝えられており、それによれば、彼の庇護民で（サビニとウンブリアの境界上に位置する）アメリカ出身のロスキウスは、その父親がきわめて有力なローマ人と恩顧（グラティア）とホスピティウムの関係を結んでいたとのことである。メテッルス家、セルウィリウス家、スキピオ家の場合には、ロスキウスの父親との間に緊密な関係が存在したために、キケロはそれを「家族並みの親しいつきあいと深い間柄」と表現するほどであった<sup>11)</sup>。ロスキウスの13の農場は、その大半がティベル渓谷に近接しているのであるが、それらが、フラミア街道に沿って北に向かうローマ人エリートにとって、通例の中継ポイントとして機能したことは間違いない<sup>12)</sup>。リウイウスによれば、元老院議員は公用で移動する際にも、携帯した天幕を使用しない場合、このようにホスピティウムの関係を利用するのが常であった。これとは対照的に、前173年の執政官 L. ポストゥミウス・アルビヌスは、プラエネステの人々に宿泊場所その他の援助を強要したとして、批判を受けている。アルビヌスは、先に私的にプラエネステのフォルトゥナ神殿を訪れていたのであるが、そこで市民は彼に公式に名誉を与えなかったため、彼は侮辱を受けたと感じていたのである。ローマ人エリートによる宿泊とは反対に、イタリア人のホスペスは、ローマ滞在中は元老院議員の邸宅でもてなしを受けたであろう<sup>13)</sup>。このような人的関係にあるイタリア人は、ローマ人と同様に恩恵にあずかっていたのである。さらに言えば、主要街道沿いのイタリア都市のエリート

家系は、人々の往来がよりまれな地域の家系とくらべると、ローマの元老院（そして、より大きくみればローマの権力構造）にたいするアクセスという点で、相当の強みを持っていたのである<sup>14)</sup>。

同盟市戦争から数十年後ではあるが、イタリア内での旅行に関しては、ホラティウスによる自身のブルンディシウムへの旅の記述（『風刺詩』第1巻第5歌。舞台設定は前38年から前37年）が、エリートと非エリート両者の体験を、愉快に描き出している。ホラティウスは、マエケナス、L. コッケイウス・ネルウァ、C. フォンティウス・カピトに同行して、アンクスルからブルンディシウムまで旅するのであるが、彼らはアントニウスに面会する予定で、その意味で「重要な公務」に従事することになっていた。後にシヌエッサで、ウェルギリウスその他が合流する。一行は、フォルミアエのA. テレンティウス・ウァッロ・ムレナの農場に滞在したが、そこではカピトが食べ物をふるまった。シヌエッサをこえてすぐのところ、彼らは小農場で夜を過ごしたが、それは公務旅行者のために国家によって提供されたものである。カウディウムでは、コッケイウス自身の農場が、宿泊先となる。それは、「町の宿屋より山の手に位置する」ものであった。ベネウエントウムのホスベスのところでは、彼の調理場での作業がすんでのところで大火災にいたるという事件もあったが、彼はおそらくは宿屋の主人というよりも、一行の友人と捉えるのが適切であろう。奴隷の随伴が報告されているからである<sup>15)</sup>。トリウィクム近郊で、一行はもうひとつ別の農場に滞在している。このように、アンクスルからブルンディシウムまで旅は、伝統的な共和政エリートの慣習に一致した形で描写されており、その意味で、ルキリウスの『風刺詩』第3巻の断片に描かれている旅行と似通っている。ホラティウスの詩は、それとの緊密な関連性を示しているのである〔ホラティウスは、前2世紀の風刺詩家ルキリウスの旅行の描写をモデルとして、自身の旅行を描いているのである〕。本当のことを言えば、このような要人の一行には、当時深刻な問題となっていた山賊の攻撃から護るために、かなりの護衛がついていただろう<sup>16)</sup>。一方、ホラティウスの道程の前半、ローマからアンクスルまでの彼と修辞学者ヘリオドルスの二人旅は、身分のそう高くない旅行者の体験を如実に反映した形で描かれている。旅行初日、ホラティウスは、アリキアの「質素な宿屋」で夜を過ごし、続いてフォルム・アッピイ（「この町には悪徳宿屋といかさま船頭がたくさんいる」と描写されている）からアンクスルまで舟で移動したが、それは快適な旅路とは言い難いものであった。確かに、アリキアでの宿泊の質素さを強調するホラティウスの意図は、元来、「高雅な」詩歌にたいする意気込みの欠如を、詩的表現で強調することにあっただのかもしれない<sup>17)</sup>。しかしながら、道程の前半と後半で強調される相違は、詩的言説の観点からしても、興味をひくものである。三頭政治家オクタウィアヌスの命を受けて半ば公的な旅をするホラティウスのような者にとって、アリキアはかなり上等の宿泊を当然期待できたはずの場所であった。多くの金持ちが、ここに農場を所有しており、ここはアッピア街道沿いの最初の宿場となっていたのである<sup>18)</sup>。それ以上に注目すべきは、アリキアはオクタ

ウィアヌスと特に縁の深い場所であったということである。この町は、彼の母親アティアの生まれ故郷なのである<sup>19)</sup>。ここに、旅行に関して、対応する二つの形態が描き出されることになる。一方は、ホラティウスとヘリオドルスという身分のそう高くない個人が、つましい宿屋で不快な状況に耐えなければならない旅行。他方は、身分の高い使節団が、個人の農場と国家の施設に滞在しながら、旅の労苦を和らげるためにイタリア中の社会的関係を駆使する旅行である。

## 個人と共同体

ホスピティウムとは、当初は個人間の関係であり、この状況はその後も継続的に認められるのであるが、共和政期には、ローマの有力者と共同体全体との間に明確な形をもった結合関係が発展した。この関係は、共和政後期と帝政期に盛んな都市パトロネジのなかに(部分的に)存続している<sup>20)</sup>。ホスピティウムという曖昧さを残す用語が、より明確なパトロキニウムという言葉以上に好んで用いられたのである<sup>21)</sup>。フンディ産の魚の形をした青銅板には、ある個人(残念ながら、彼の名前はティトゥスという個人名と氏族名の最初の文字を除いて残っていない)と南ラティウムの当該地域との間の関係が記されている<sup>22)</sup>。

イタリアの共同体とローマのエリートとの関係が、元々はその共同体がローマの支配下に組み込まれた状況に起因しているケースもいくつか存在する。例えば、イタリア各地を征服したローマの将軍、そしてその一門は、征服地域と長期間にわたる関係を維持し得たのである。Q. ミヌキウス・ケレルは、前197年ゲヌア周辺のリグリア人を征服したが<sup>23)</sup>、彼の一門はリグリアに関する諸問題に関与し続けている。具体的には、前117年、ゲヌアの住民と近隣のリグリア人(ウイトゥリイ・ランゲンセス)との境界争いを調停するための委員団が構成された時、ミヌキウスの名を持つ者2名が職務を果たすべく委員に任命されている<sup>24)</sup>。また、ウァレリウス・マクシムスに従えば、C. ファブリキウス・ルスキヌス(前282年と前278年の執政官)は、サムニウムにおける戦勝の後、「全サムニウム人を自らのクリエンテラにおいた」とされているが、このウァレリウスの考えには当然ながら疑義が呈されている。しかしながら、ウァレリウスにとって、戦勝がこの種の人的関係に発展し得るということは、この場合の事実がどうであれ、自明の理であったのに違いない<sup>25)</sup>。同様に、ラテン、ローマ植民市の建設を担当した公職者にも、その住民と長期の関係を維持するという傾向があった。プルタルコスが『フラミニヌス伝』で記しているように、その人的関係は選挙における支援活動を含んでいた可能性がある。プルタルコスは、T. フラミニヌスの驚異的なスピードでの執政官就任を、フラミニヌスが建設に関与したコサとナルニアの植民者の支援のおかげだと考えているのである。ただ、ここでプルタルコスは事の詳細については誤解していた可能性もある。リウイウスによれば、フラミニヌスはウェヌシアの植民市の補充を担当した三人委員であり、リウイウスはコサとナルニアには言及し

ていないのである<sup>26)</sup>。しかしながら、前2世紀にローマの植民活動が停止した(かにみえる)理由の一つは、植民市を建設した者が、それが巨大なローマ植民市の場合は特に、選挙活動で有利な立場を取ることができ、元老院の他のメンバーが損害を被ってしまうと元老院議員たちが心配したからである。ただ現実には、前2世紀の新しいローマ植民市の大半はローマ市から遠く隔たっており、植民者が都市ローマの政治生活において重要な役割を果たすことはできなかったということも、忘れてはならない<sup>27)</sup>。

以上のように、ホスピティウムという人的関係は、同盟市戦争前のイタリアにおいてきわめて重要な役割を果たしていたと考えることができる。さらに具体例を一つ付け加えるならば、前186年のバッカナリア事件があげられる。そこでは、ホスピティウムを通じた人的関係によって、バッカナリア事件とそれを弾圧するローマ当局の対応が、イタリア中に迅速に知れ渡ったのである<sup>28)</sup>。ただ、これまで述べてきたような集団的、個人的形式のホスピティウム、そして、大まかに言えばパトロン・クリエンス関係へと転化していく個人と共同体の間の人的関係の他に、個々のローマ貴族がイタリアの共同体とその指導者層と関係を持つにあたっては、より非公式な性格を帯びたメカニズムも存在していた。

例えば、前170年代においては、ローマの公職者が公共事業によって特定の植民市を援助している事例を認めることができる。具体例を列挙しよう。前179年、監察官M. アエミリウス・レピドゥスは、タツラキナに防波堤を建設した<sup>29)</sup>。また、前174年には、監察官Q. フルウィウス・フラックスとA. ポストゥミウス・アルピヌスが、その頃創設された植民市において、より野心的な建設計画を企てている。それは、例えば、ポテンティアの水道施設、ピサウルムとフンディの神殿、ピサウルムとシヌエッサにおける道路舗装工事などである<sup>30)</sup>。その4年後には、法務官C. ルクレティウス・ガッルスは、アンティウムに水道管を設置し、そのアエスクラピウスの神殿を絵画で飾るために、戦利品の売上金を使用している<sup>31)</sup>。前174年の事業で恩恵を受けた諸都市では、住民は大変な感謝の念を示したと伝えられているものの、事業推進の動機については議論の余地が残っている。一方では、これらの事業は、ローマ市における公共建築物と生活環境改善のための措置に責任のあった監察官が、その関心をイタリア都市にも拡大した結果と考えることもできるが、その他の理由も存在したことは確実である。つまり、フルウィウス・フラックスの親類の一人は、10年前にポテンティアとピサウルムが建設されたとき、その建設者の一人であったし<sup>32)</sup>、アエミリウス・レピドゥスは、タツラキナに土地を所有しており、個人経費と公的契約を混同したとして非難されているのである<sup>33)</sup>。同様に、ルクレティウス・ガッルスは、アンティウムに不動産を所有していたと伝えられている<sup>34)</sup>。ローマの植民市建設における制度的枠組みにおいては、慈善行為の原動力として活躍する富裕な地元エリートが存在し得なかったと考えることもできるのかもしれない。その意味では、ローマの公職者による介入は、まったくもってふさわしいものであった<sup>35)</sup>。しかしながら、公職者と都市との個人的な関係こそが、どの共同体がどのような恩恵を享受するか決定にあたって重要なウェイトを占めた

ことは、疑いない事実である。

ローマの将軍が、イタリア同盟軍と勝ち取った戦勝を記念するにあたって、イタリアの諸共同体を巻き込む場合もあった。そのもっとも顕著な例は、前146年コリントスを征服したL. ムンミウスで、彼はコリントスから略奪した彫像や絵画を見せびらかすために、それらをイタリア中の都市に分配したのである。トレブラ・ムトゥエスカ<sup>36)</sup>、クレス<sup>37)</sup>、サピニのヌルシア<sup>38)</sup>、パルマ<sup>39)</sup>、フレゲッラエ<sup>40)</sup>、スペインのイタリカ<sup>41)</sup>、そして最近ではポンペイ<sup>42)</sup>で、彼による分配の証拠が発見されている。マルシ人の地マッルウィウムでも、同様のモニュメントが見つかっている。それは、ハドリアヌス時代に同定されているが、おそらくは前146年スキピオ・アエミリアヌスによってカルタゴからもたらされた像と関連付けられるべきであろう<sup>43)</sup>。

以上述べてきたように、ローマの貴族は、イタリアの同盟市、植民市といった諸共同体にたいして、恩恵施与、建築活動、政治的サポートといった様々な方法で援助をおこなってきた。しかしながら、その援助にあたって、ローマの貴族はきわめて恣意的でもあった。例えば、議論喧しい前174年の建設事業の担当者の一人、Q. フルウィウス・フラックスは、その翌年にクロトンのユノ・ラキニア神殿から大理石板を略奪した張本人でもあったのである。元老院での抗議によって、最終的に大理石板はクロトンに返還されることとなったが、それを元あった場所に付け直すのはきわめて難しいことであった<sup>44)</sup>。

ローマとイタリアの貴族間におけるコミュニケーションに関しては、さらに別の形態も存在した。その関係が展開された重要地点は、ナポリ湾である。ナポリ湾は、前2世紀初頭よりローマ人エリートのお気に入りの滞在地となったが、沿岸の邸宅で催された余暇の活動では、ローマ人のみならずイタリア人も教養にあふれた娯楽を楽しんだのである<sup>45)</sup>。具体例をあげて言うならば、例えばクマエのプロッシウスは、プルタルコスによればティベリウス・グラックスの農地法に感化を与えた哲学者であるが、その彼が護民官グラックスに会ったのは、ミセサムにある護民官の母コルネリア所有の邸宅であったかもしれない<sup>46)</sup>。コルネリアとイタリア人エリートとのさらなるホスピティウムに関しては、ウァレリウス・マクシムスの挿話がこれを示唆している。カンパニア出身のある奥方がコルネリアの邸宅でもてなされて、そこで自分のみごとな宝石を見せびらかしていたのだが、コルネリアはティベリウスとガイウスが学校から帰ってくるまで彼女を会話に引き留めて、帰ってくると彼らが自分の宝だと言い返したのである<sup>47)</sup>。ただ、このエピソードがカンパニアのこととされているのか、ローマでのこととされているのかは判然としない。知的、文学的生活には、それがローマでおこなわれたとしても、多くのイタリア人が参加したに違いない。キケロは、『プルトゥス』においてイタリア出自の名高い弁論家を列挙しているが、彼らの出身地としては、マルシ、ソラ、ボノニア、アスクルム、フレゲッラエなどがあげられる<sup>48)</sup>。同様のことは、前2世紀ローマで活躍した文人にもあてはまり、彼らの多くはローマではなくイタリアの出身であった。具体的には、エンニウス、ナエウィウス、パク

ウィウス、プラウトゥスがあげられる。

## 婚姻

ホスピティウム、軍務、外交といった正式なつながりの他にも、イタリア人とローマ人とが出会い、共通の文学的、知的関心に基づいた関係を構築する機会が幅広く存在したことは、疑い得ない事実である。とは言え、個々のローマ人とイタリア人との間の可能な限りでのもっとも親密なつながりは、婚姻であった<sup>49)</sup>。法的には、ローマ市民は、ローマ市民、もしくはラテン人であろうと同盟者であろうと集団的に通婚権を与えられた共同体出身の者、または個人的に通婚権を与えられた者とのみ婚姻関係を結ぶことができた<sup>50)</sup>。

ローマ最初期の歴史には、異部族間の結婚というテーマが繰り返しあらわれる。例えば、リウィウスは、新しくつくられた都市ローマの人々と婚姻を結ぶことをその他の共同体の人々が拒んだために、ロムルスはサビニ女を略奪したと伝えている<sup>51)</sup>。また、ハリカルナッソスのディオニュシオスは、ローマ人とラテン人との戦争を述べるなかで、前495年の立法に言及している。その立法とは、ラテン人と結婚したローマ人女性（とその逆のケースにおいても）に、居住地の自由を与えるものであった。ディオニュシオスによれば、「多くの女性は、2国家間の親類関係と友人関係にゆえに、他の国に嫁にやられていた」のである。この立法の結果は、ラテン人と結婚していたローマ人女性は、ほとんどすべてがローマに戻り、ローマ人と結婚していたラテン人女性は、二人を除いてすべてが夫ともにローマに留まるというものであった<sup>52)</sup>。初期ローマ史におけるもう一つの例は、マルウェントゥムのオタキリアである。彼女は、ファビウス家による対ウェイ遠征の唯一の生き残りとして結婚したが、フェストゥスの伝えによれば、彼は「オタキリアの巨額の財産」に魅惑されたのである<sup>53)</sup>。

しかしながら、最初期ローマ史の散発的な事例からさらに先に進み（それらの事例は、国家間関係の文脈におけるローマ人的思考のなかで、婚姻が重要な地位を占めていたことを強調しているのであるが）、同盟市戦争前夜において、ローマ人とイタリア人エリートとの婚姻がいかなる頻度でおこなわれていたかを、より包括的に分析することは、困難であると言わざるを得ない。社会的により下層の人々の婚姻の程度を評価することは、さらに困難である。ただ、一つ言及の価値があるとすれば、イタリアの諸共同体間において、婚姻に関する慣習がさまざまに存在した可能性があったことである。この可能性は、文学作品において示唆されており、例えばアウルス・ゲッリウスは、部族外の人間と結婚したら魔術的な力を失うというマルシ人の言い伝えを記述している<sup>54)</sup>。

史料は少ないが、それでもなお、前3、2世紀におけるローマ人とイタリア人との婚姻については、いくつか文献史料が残っており、それらは、特に注目すべき必要がある<sup>55)</sup>。最初は、パクウィウス・カラウィウスの例である。彼は、カプアがローマからカルタゴに

寝返った時のカプアの指導者であったのだが、リウイウスによれば、彼はアッピウス・クラウディウスの娘と結婚しており、彼自身の娘はマルクス・リウイウスに嫁いでいた。言うまでもなく、二人ともローマ人である。その結果として、カラウイウスは、必要に迫られない限りローマへの謀反には反対であったと伝えられている<sup>56)</sup>。カプア人による反乱の勃発を押しとどめていたのは、唯一、「多くの傑出した有力な家系をローマ人と結びつけてきた古くからの通婚権」であった<sup>57)</sup>。さらに、以前の〔前4世紀における〕カプア人による謀反の企みが挫折したのは、リウイウスによれば「個人的なホスピティウムと親戚関係によってつながりを持つ人物を通じて」ローマに陰謀の情報が伝わったからである<sup>58)</sup>。前210年、ローマが最終的にカプアにたいする支配を再確立した時、カンパニア人は元老院を前にして自身と自身の財産のために赦免を要求したが、その言い分とは「カンパニア人はローマ市民であり、ローマ人と、多くの場合婚姻で結びつけられ、現在は緊密な血縁関係でつながれている。カンパニア人とローマ人とは、古来の通婚権によって一つにされたのである」というものであった<sup>59)</sup>。確かに、カプアの事例は、明らかに特殊なものである。前340年の「カンパニアの騎士」への完全市民権付与に引き続き、カプア人は前338年、「投票権無き市民権」の地位を与えられているのである<sup>60)</sup>。しかし、通婚の問題がここでとりわけ重要視されている状況は、注目に値する。

第二に分析に値するエピソードは、同盟市戦争期における、C. マリウス指揮下のローマ軍とポッパエディウス・シロ指揮下のマルシ軍の戦いについてである。ディオドロスの伝えるところでは、「両軍の兵士たちは、互いに多くの個人的な友人を認め、たくさんの昔の戦友を思い出し、多数の親類縁者を発見した。彼らは、婚姻に関する法によって、この種の緊密な人間関係に結びあわされていたのである」。そこで、マリウスはポッパエディウスに近づき、「彼らは互いに親戚のように話し合った」のである<sup>61)</sup>。以上の二つのエピソードにおける類似点は、ここで強調しておく価値がある。それは、両事例においては、ローマ人は以前の戦友と戦っているということ、そして、兵士たちを結合する要素として、血縁関係と婚姻が強調されているということである。

婚姻というモチーフと同様に、カプアの離反と同盟市戦争の叙述においては、ホスピティウムというモチーフもまた認めることができる。リウイウスは、前212年のローマによるカプア攻撃にいたるまでの記述において、ホスピティウムの裏切りに関する挿話を二つ伝えている。第一は、前執政官Ti. センプロニウス・グラックスの死に関するものである。彼の死は、彼が捧げていた犠牲獣の肝を蛇が繰り返し食べたことすでに予言されていた。リウイウスによれば、あるルカニア人のホスピスが、自らの部族の自由と引きかえに、グラックスをカルタゴ人に売る約束をしていたのであるが、結局グラックスは奇襲にあい、勝算のない戦闘のなかで殺されたのである<sup>62)</sup>。その直後に、リウイウスはT. クィンクティウス・クリスピヌスとカンパニア人バディウスに関する話を、比較的詳しく描写している。彼らはホスピティウムによって結びつけられていたが、そのホスピティウムとは、バディ

ウスがローマのクリスピヌス邸で養生しながら病気を治したという出来事で深められたものであった。パディウスがクリスピヌスに一騎打ちを挑むと、最初クリスピヌスは相手がホスベスで、ホスベスを殺すのは不敬にあたるとして、戦闘を拒んでいた。しかし、パディウスが公に過去のホスピティウムを放棄すると、両者は戦い、パディウスが逃げ帰ることとなったのである<sup>63)</sup>。ウォレリウスは、同じ事件を伝えるなかで、一騎打ちに詳しく言及しないものの、パディウスを戦闘で死んだものとしており、クリスピヌスを英雄として描いている<sup>64)</sup>。

カプアの離反と同盟市戦争は、とりわけ道徳的範例を大量に提供するという点で、ウォレリウスに資するところ大であった。ウォレリウスにとっては、カプアの離反は都市による忘恩の原型であり、彼は第二次ポエニ戦争期のこの出来事を、カウディネ山道の戦いでサムニテス人にこっぴどくやられたローマ軍にたいして、カプア人が示した敬意と配慮に対比している<sup>65)</sup>。同盟市戦争もまた、教訓的な範例を提供している。一例は、P. ウェンティディウス・パッスの事例で、彼は子供の時、アスクルムの戦い後の凱旋式でCn. ポンペイウス・ストラボに捕虜として連れ出されたのだが、その後前43年に法務官、執政官と続けざまに就任するまでに成長し、結局その5年後にパルティア人にたいする戦勝で自身が凱旋式を挙げることとなったのである<sup>66)</sup>。

わたくしの考えでは、以上の文脈のなかにこそ、カプアの離反と同盟市戦争の記事のなかで繰り返し言及される親戚関係とホスピティウムを位置付けなければならない。両者は、内戦として表現され得るのである。とりわけ、ウェッレイウス・パテルクルス（彼の曾祖父の祖父であるアエクラムのミナティウス・マギスは、同盟市戦争でローマ側に立って戦い、個人的市民権付与の賞を受けた）は、同盟市戦争は内戦であると強調している。彼によれば、同盟市戦争以前は、ローマ人は「同族の者たち（すなわちイタリア人）を、外国人、よそ者といって蔑んでいたのである」<sup>67)</sup>。この見方は、フロルスによってもっとも明確に支持されている。彼は、「その戦いは「同盟市戦争」と呼ばれているけれども、現実には、内戦であった」と述べている<sup>68)</sup>。そして、おそらくはウォレリウス・マクシムス（すでにみたように、彼はラテン人とイタリア人との相違に混乱を来している）も同じ見方であった。婚姻とホスピティウムが強調されればされるほど、戦争は内紛の観を呈するのである。ウォレリウスとウェッレイウスがティベリウス帝期に執筆し、フロルスも帝政期に筆を執っているという事実は、わたくしの分析手法がいわゆる「ポスト・アウグストゥスの」イタリア観に影響を受けているということになるのかもしれない。このイタリア観では、イタリア人の多様性以上に、ローマとイタリアの統合と共通の伝統が強調されるのである。同盟市戦争の勃発直後では、ローマにおける親イタリア分子にたいする敵愾心が高まり、イタリア人を反乱へと扇動したかどで幾人かが裁判を受けるまでにいたっている<sup>69)</sup>。（アッピアノスの伝えによれば）以前は賞賛的であったスキピオ・アエミリアヌスですら、ティベリウス・グラックスの農地法直後にイタリア人を支援したとして、ローマ人間での

人気が低下したほどである<sup>70)</sup>。アウグストゥス統治下では、まったく反対に、イタリア同胞との和合は、前向きに賞賛の対象とされたのである。

### ホスピティウム、婚姻、そしてその重要性

同盟市戦争勃発にいたる出来事の流れを解明するにあたって、ローマ人とイタリア人との間の婚姻関係、友誼関係の果たした役割を評価することは、困難であると言わざるを得ない。史料は断片的で、このような人的関係を強調する伝承は、その多くがイデオロギーに潤色されているのである。わたしたちが直面している問題は、ローマ共和政史研究にきわめてありがちなことではあるが、まとまりを欠くエピソードの連なりから、いかにして首尾一貫した叙述および分析を構築するかということである。

P. A. ブラントは、ホスピティウムやその他の緊密な人的関係の存在も、同盟市戦争の勃発を抑えることはなかった、と指摘した<sup>71)</sup>。ローマの社会構造ピラミッドの頂点を構成する300名の元老院議員と、それよりもはるかに数の多い同盟市の上層民との間には、[人数の上での] 不一致が存在したため、同盟市の指導者層の多くがローマ人エリート層と緊密な個人的関係を結んでいたとは考えにくい。例えば、テッセラ・ホスピタリスを邸宅に飾る行為は、彼らの名声を、むしろ彼ら自身の共同体において高めるのに役立っていたのかもしれない。古代ギリシアの事例から明らかなように、ホスピタリスを多く持てば持つほど、自身の名誉はいよいよ高まるのである<sup>72)</sup>。しかしながら、ホスピティウムという個人的な人間関係が、潜在的にはあれ、ローマ人とイタリア同盟者とのコミュニケーションの絆を提供した可能性は、否定することができない。とりわけ、ポッパエディウス・シロヤリウィウス・ドルゥススといった各々の共同体で指導的な立場を取る人物の場合は、特にそうである。また、合法であれ非合法であれ、(一部の)ローマ人とイタリア人との間に異部族間結婚が存在したであろうことも、否定できないことである。もちろん、この種の人的関係の度合いは、さまざまな要素に影響を受けて変化した。考え得る要素を少しだけあげるとしても、共同体の地位、通婚権の有無、ローマからの物理的な距離、街道網その他の交信手段へのアクセス、などが指摘できよう。マルシ人は、文献史料のなかで、個人的であれ集団的であれホスピタリスや結婚相手として、ローマと特に緊密なつながりを持っていると繰り返し言及されるが、このことは、マルシ人の都市ローマとの地理的な近さを考慮に入れるならば、驚くにはあたらない<sup>73)</sup>。キケロは、ローマ軍と反乱軍との会談の最中、Sex. ポンペイウスがマルシ人の指導者P. ウェッティウス・スカトに向けて語ったのを目撃し、次のように伝えている。いかなる名で声をかけるべきかウェッティウス・スカトに尋ねられると、ポンペイウスは、「気持ちの上ではホスピタリスだが、この状況下では敵と呼んでくれ」と答えたのである<sup>74)</sup>。

この種の人的関係によって、個々の共同体ではなく、イタリア人が全体としてどの程度

恩恵を享受したのか？ホスピティウムやパトロネジといった人的関係が用いられる係争は、その多くが共同体の富、そして（あるいは）所有地（古代イタリアにおいては、富と所有地はたいいていの場合区別することが困難である）と関係していたと考えてよいだろう。ミノキウス家が、ゲヌア人と近隣部族との境界争いを調停したとき、問題となっていたのは、本質的に財政上の事柄、具体的には、両共同体が手にすることのできた不動産であった。同じく、同盟市戦争後も、個々の都市が植民のための土地分割の脅威をかわすために、パトロネジのつながりを利用して（例えば、ウォラテッラエ）<sup>75)</sup>。イタリア人が、前2世紀に次第に共通の自己認識を持つようになると<sup>76)</sup>、個々別々の共同体とともに集合体としてのイタリア人の利益のために、[ローマへの]陳情がおこなわれるようになる。例えば、(アッピアノスが伝えるところでは)ティベリウス・グラックスの改革がイタリア半島の土地所有の形態に悪影響を及ぼしたために、イタリア人は助けを求めてスキピオ・アエミリアヌスに頼ったのである<sup>77)</sup>。また、すでに前177年、ルキウス・パピリウス（彼はケクロによってイタリア人弁論家の一人に数えられている）は、実に「フレゲッラエ人とラテン植民者のために」弁論をおこなっている<sup>78)</sup>。

前2世紀の最後の数十年において、イタリア人のローマにたいする反感が増大し、彼らが自分たちの共通の利害のためにローマ人エリートとの人的つながりを利用しようとしたと考えてよいのならば、このことは、ローマ人とイタリア人とのつながりだけでなく、イタリア諸共同体間自体のつながりをも含意することとなる。これらの人的つながりは、最終的に、彼らにローマにたいする反乱をおこす自信を与えた。この時、彼らは、数十年前のフレゲッラエによる反乱の失敗に照らして、とりわけ際だった意思の統一を示したのである<sup>79)</sup>。必ずしも明確ではないものの、史料には、この種の人的関係の証拠がいくつか認められる。例えば、カプア人エリートが、対ローマ反乱のかどで財産没収と奴隷化の罰を受けた時、「他の共同体に嫁にっていた」彼らの娘たちは罰を免除された<sup>80)</sup>。また、ブルンディシウムのラテン植民市出身の悲劇作家パクウィウスは、エンニウスの姉妹の息子にあたるが、そのエンニウスは近くのメッサピアのルディアエ出身である<sup>81)</sup>。同様に、アレトリウムのベティリエヌス・ウォルスは前2世紀末もしくは前1世紀初頭に、一連の公共工事で生まれ故郷の町を一人で造りかえてしまったが、その彼がブルンディシウム近郊に不動産を所有し得たという事実は<sup>82)</sup>、個々の[イタリア人エリート]と複数の異なった共同体との間の関係が発展したことを物語っている。彼は、この不動産を、単に金銭による取引で入手しただけかもしれないが、そうでなければ、婚姻や相続の結果として手に入れたのかもしれない。

イタリア人とローマ人との間の個人的なつながりがどれほど重要であったとしても、最終的に同盟市戦争勃発へといたってしまった事態の趨勢を理解しようとするならば、第一にわたしたちが注意すべきは、おそらくは、イタリア人とイタリア人を結びつけた血縁の関係と友誼の絆であろう。

## 註

- \* ドレスデンでの学会に招いてくださったマルティン・イエーネ、レネ・プファイルシフター両氏に、ここに感謝の意を表します。また、有益なコメントをお寄せくださった学会参加者の皆さんにも感謝申し上げます。ただし、本論文に誤りがあるとすれば、それはすべてわたくし自身の責任であります。
- 1) Plut. Cato min. 2, 1-4; Val. Max. III 1, 2; Cic. fam. XVI 22. また, D. R. Shackleton Bailey (ed.), Cicero. Epistulae ad familiares, vol. 2: 47-43 B.C. (Cambridge Classical Texts and Commentaries 17), Cambridge 1977, ad loc.; vir. ill. 80, 1 も参照のこと。
  - 2) Vitr. VI 5, 2.
  - 3) Vell. II 14.
  - 4) ポッパエディウス・シロについては, Diod. XXXVII 2, 6 をみよ。また, E. T. Salmon, Samnium and the Samnites, Cambridge 1967, 335; Cesare Letta, I Marsi et il Fucino nell'antichità (Centro Studi e Documentazione sull'Italia Romana, Monografie a supplemento degli Atti 3), Milan 1972, 100; Henrik Mouritsen, Italian Unification. A Study in Ancient and Modern Historiography (BICS Supplement 70), London 1998, 124f. も参照のこと。
  - 5) 特に, Gabriel Herman, Ritualised Friendship and the Greek City, Cambridge 1987. ローマ世界に関しては, E. Badian, Foreign Clientelae (264-70 B.C.), Oxford 1958, 11-13. 154f. をみよ。
  - 6) Liv. I 45, 2; 49, 8. また, Ladislaus J. Bolchazy, Hospitality in Early Rome. Livy's Concept of Its Humanizing Force, Chicago 1977, 23 も参照のこと。
  - 7) T. J. Cornell, The Beginnings of Rome. Italy and Rome from the Bronze Age to the Punic Wars (c. 1000-264 BC) (Routledge History of the Ancient World), London et al. 1995, 87-92; Christopher John Smith, Early Rome and Latium. Economy and Society c. 1000 to 500 BC (Oxford Classical Monographs), Oxford 1996, 93-97, 120f.
  - 8) ILLRP 1066 (= CIL I<sup>2</sup> 1764). また, Felice Barnabei, Trasacco. Di una rarissima "tessera hospitalis" con iscrizione latina, NSA (1895), 85-93; Cesare Letta / Sandro D'Amato, Epigrafia della regione dei Marsi (Centro Studi e Documentazione sull'Italia Romana, Monografie a supplemento degli Atti 7), Milan 1975, 216f. 羊頭碑文の別例としては, ILLRP 1064 (= CIL I<sup>2</sup> 23) をみよ。
  - 9) Plaut. Poen. 1046-1050.
  - 10) Liv. XLII 17.
  - 11) Cic. S. Rosc. 15.
  - 12) Cic. S. Rosc. 20.
  - 13) Liv. XLII 1, 10. カメリヌムからの訪問者がローマでもてなしを受けた事例については, ORF4 8 Cato frg. 56 をみよ。
  - 14) T. P. Wiseman, New Men in the Roman Senate 139 B.C. - A.D. 14 (Oxford Classical and Philosophical Monographs), Oxford 1971, 28-30.
  - 15) Tønnes Kleberg, Hôtels, restaurants et cabarets dans l'antiquité romaine. Études historiques et philologiques (Bibliotheca Ekmaniana 61), Uppsala 1957, 12. P は, わたくしとは反対の見解を示す。一方, Michael Brown (ed.), Horace. Satires I, Warminster 1993, 147 は, 宿屋の主人とホスベスという両方の可能性を認めている。
  - 16) I. M. Le M. DuQuesnay, Horace and Maecenas. The Propaganda Value of Sermones I, in: Tony Woodman / David West (edd.) Poetry and Politics in the Age of Augustus, Cambridge 1984, 19-58, at 39-43.
  - 17) Emily Gowers, Horace, Satires 1. 5: an Inconsequential Journey, PCPhS 39 (1993), 48-66, at 54.
  - 18) Wiseman (n. 14), 28.
  - 19) Suet. Aug. 4.
  - 20) Badian (n. 5), 11f.

- 21) Badian (n. 5), 11-13; Wiseman (n. 14), 34f.; Herman (n. 5), 39; P. A. Brunt, *The Fall of the Roman Republic and Related Essays*, Oxford 1988, 31, 386.
- 22) ILLRP 1068 (= CIL I<sup>2</sup> 611 = CIL X 6231 = ILS 6093). デグラッシィにより, この史料は前3世紀末および前2世紀前半に年代特定されている。
- 23) Liv. XXXII 29, 6-8.
- 24) ILLRP 517 (= CIL I<sup>2</sup> 584 = CIL V 7749 = ILS 5946). また, Badian (n. 5), 157 も参照。
- 25) Val. Max. IV 3, 6.
- 26) Plut. Flam. 1, 6-2, 1; Liv. XXXI 49, 6. また, Rene Pfeilschifter, *Titus Quinctius Flamininus* (Hypomnemata 162), Göttingen 2005, 48 n. 76 もみよ。
- 27) Badian (n. 5), 162f.; E. T. Salmon, *Roman Colonization under the Republic (Aspects of Greek and Roman Life)*, London 1969, 112f.
- 28) Liv. XXXIX 17, 4.
- 29) Liv. XL 51, 2.
- 30) Liv. XLI 27, 11f.
- 31) Liv. XLIII 4, 6.
- 32) Liv. XXXIX 44, 10.
- 33) Liv. XL 51, 2.
- 34) Liv. XLIII 4, 6.
- 35) Mario Torelli, *Edilizia pubblica in Italia centrale tra guerra sociale ed età augustea: ideologia e classi sociali*, in: *Les "bourgeoisies" municipales italiennes aux II<sup>e</sup> et I<sup>er</sup> siècles av. J.-C.* Centre Jean Bérard. Institut Français de Naples, 7-10 décembre 1981 (Colloques internationaux du Centre National de la Recherche Scientifique 609), Paris et al. 1983, 241-250, at 244.
- 36) ILLRP 327 (= CIL I<sup>2</sup> 627 = CIL IX 4882 = ILS 21a).
- 37) ILLRP 328 (= CIL I<sup>2</sup> 631 = CIL IX 4966 = ILS 21).
- 38) ILLRP 329 (= CIL I<sup>2</sup> 628 = CIL IX 4540 = ILS 21b).
- 39) ILLRP 330 (= CIL I<sup>2</sup> 629 = CIL XI 1051 = ILS 21c).
- 40) AE (1973) 34; E. Bizzarri, *Titolo mummiano a Fabraterra Nova*, *Epigrafica* 35 (1973), 140-142.
- 41) ILLRP 331 (= CIL I<sup>2</sup> 630 = CIL II 1119 = ILS 21d).
- 42) Andrea Martelli, *Per una nuova lettura dell'iscrizione Vetter 61 nel contesto del santuario di Apollo a Pompei*, *Eutopia* NS 2, 2 (2002), 71-81.
- 43) ILLRP 326 (= CIL I<sup>2</sup> 625 = CIL IX 6348 = ILS 67). Letta / D'Amato (n. 8), 71-77 も参照。
- 44) Liv. XLII 3.
- 45) John H. D'Arms, *Romans on the Bay of Naples. A Social and Cultural Study of the Villas and Their Owners from 150 B.C. to A.D. 400* (Loeb Classical Monographs), Cambridge, Mass., 1970, 1-17; Elizabeth Rawson, *Intellectual Life in the Late Roman Republic*, London 1985, 20-25.
- 46) Plut. Tib. Gracch. 8, 4f.
- 47) Val. Max. IV 4 praef.
- 48) Cic. Brut. 167-170. Rawson (n. 45), 34 も参照のこと。
- 49) Wiseman (n. 14), 53.
- 50) Susan Treggiari, *Roman Marriage. Iusti Coniuges from the Time of Cicero to the Time of Ulpian*, Oxford 1991, 43-49; David Cherry, *The Minician Law: Marriage and the Roman Citizenship*, *Phoenix* 44 (1990), 244-266, at 244-246.
- 51) Liv. I 9, 1-5. Emma Dench, *Romulus' Asylum. Roman Identities from the Age of Alexander to the Age of Hadrian*, Oxford 2005, 23 も参照のこと。
- 52) Dion. Hal. ant. VI 1, 2f.
- 53) Fest. P. 174 Lindsay.
- 54) Gell. XVI 11, 1f.
- 55) Wiseman (n. 14), 53-55; Hartmut Galsterer, *Herrschaft und Verwaltung im republikanischen Italien*.

- Die Beziehungen Roms zu den italischen Gemeinden vom Latinerfrieden 338 v. Chr. bis zum Bundesgenossenkrieg 91 v. Chr. (Münchener Beiträge zur Papyrusforschung und antiken Rechtsgeschichte 68), Munich 1976, 144.
- 56) Liv. XXIII 2, 5-7.  
57) Liv. XXIII 4, 7.  
58) Liv. VIII 3, 3.  
59) Liv. XXVI 33, 3.  
60) Liv. VIII 11, 16. これについては, S. P. Oakley, A Commentary on Livy. Books VI-X, vol. 2: Books VII-VIII, Oxford 1998, 514f. も参照のこと。Liv. VIII 14, 10. これについては, A. N. Sherwin-White, The Roman Citizenship, Oxford 1973<sup>2</sup>, 40 も参照のこと。  
61) Diod. XXXVII 15, 2f.  
62) Liv. XXV 16.  
63) Liv. XXV 18, 4-15.  
64) Val. Max. V 1, 3.  
65) Val. Max. V 1 ext. 5.  
66) Val. Max. VI 9, 9.  
67) Vell. II 15, 2; 16, 1-3; Mouritsen (n. 4), 10.  
68) Flor. epit. II 6.  
69) Mouritsen (n. 4), 131-137.  
70) App. civ. I 78-85 (= 19 f.).  
71) Brunt (n. 21), 31.  
72) Herman (n. 5), 36.  
73) [本論文が発表された論文集 (本翻訳末尾, 訳者による解説をみよ) にある] Rene Pfeilschifter による議論も参照のこと。  
74) Cic. Phil. XII 27.  
75) Nicola Terrenato, *Tam firmum municipium*: the Romanization of Volaterrae and its Cultural Implications, JRS 88 (1998), 94-114.  
76) [本論文が発表された論文集 (本翻訳末尾, 訳者による解説をみよ) にある] Henrik Mouritsen の論考をみよ。  
77) App. civ. I 78 (= 19).  
78) Cic. Brut. 170. この史料を理解するにあたって, わたくしは, Enrica Malcovati, L. Papirius Fregellanus, Athenaeum 43 (1955), 137-140 に従っている。E. Badian, L. Papirius Fregellanus, CR NS 5 (1955), 22f. は, これに反対の見解を示す。  
79) Mouritsen (n. 4), 118f., 130.  
80) Liv. XXVI 34, 3.  
81) Plin. nat. XXXV 19. さまざまなイタリア共同体出身の個人間における, (比較的史料状況がよい) 前1世紀の婚姻関係の実例については, Wiseman (n. 14), 61f. をみよ。  
82) F. Zevi, Alatri, in: Paul Zanker (ed.) Hellenismus in Mittelitalien. Kolloquium in Göttingen vom 5. bis 9. Juni 1974 (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-Historische Klasse III 97), Göttingen 1976, 84-96; D. Manacorda, Produzione agricola, produzione ceramica e proprietà della terra nella Calabria romana tra Repubblica e Impero, in: Epigrafia della produzione e della distribuzione. Actes de la VIIe Rencontre Franco-Italienne sur l'Épigraphie du Monde Romain (Collection de l'École française de Rome 193), Rome 1994, 3-59, at 30.

## 解 説

藤 井 崇

本翻訳は、ジョン・パターソン博士 (Dr John R. Patterson) による論文「都市ローマとイタリアの支配階層 - 友誼・血縁関係とその重要性 -」(“The Relationship of the Italian Ruling Classes with Rome: Friendship, Family Relations and Their Consequences”) の全訳である。本論文は、論文集 Martin Jehne and Rene Pfeilschifter, ed. 2006. *Herrschaft ohne Integration?: Rom und Italien in republikanischer Zeit*. Frankfurt am Main: Verlag Antike にて公にされた。ただ、本論文をここに訳出するにあたっては、パターソン博士と京都との縁によるところが大きい。2006年2月28日より同年3月5日まで、パターソン博士は京都を訪問されたが、滞在中の3月4日、京都大学大学院文学研究科にて本論文をもとにした講演会が開催されたのである。この講演会は多数の参加者を得て、パターソン博士報告後の自由討論も活発におこなわれた。本翻訳は、この講演会をふまえたうえで、パターソン博士の議論をより広く紹介するために企画されたものである。

パターソン博士は、英国オクスフォード大学、ケンブリッジ大学で教育を受けられ、現在ケンブリッジ大学古典学部で上級講師を務めておられる。博士の研究課題は、第一に、共和政中期から帝政期にかけてのローマ、イタリアの歴史学、考古学である。この分野での主要業績としては、John Patterson. 2006. *Landscapes and Cities: Rural Settlement and Civic Transformation in Early Imperial Italy*. Oxford: Oxford University Press があげられよう。本書は、当該時期のイタリアにおける都市と田園の景観の変化を、社会、経済的な動因と関連付けて考察するものである。博士の研究分野は、この他にも、イタリアの農業事情、コレギアの社会的意義、イタリア都市エリート層の社会的流動性、都市ローマのトポグラフィなど、多岐にわたっている。

ここに訳出した論文は、前2世紀から前1世紀にかけてのイタリア半島におけるローマ人エリート層とイタリア都市エリート層との間に存在した人的関係を考察し、その関係のあり方と前1世紀初頭の同盟市戦争勃発とのつながりを見通すことを、その目的としている。検討の対象とされる人的関係のなかで、特に注目されるのは、ホスピティウムに代表される友誼関係とエリート間で複雑にはりめぐらされた婚姻・血縁関係である。そして、史料不足ため博士は慎重な態度を崩さないものの、最終的に、同盟市戦争との関連においてはローマ人とイタリア人との関係よりも、イタリア人同士の関係にさらに注目する必要がある、と結論付けている。

以上の博士の議論は、記者にとっては、とりわけ次の三つの点で注目に値すると思われる

る。一つは、ローマ世界における人的関係として主要な研究対象とされてきたパトロネジにかわって、ホスピティウムという視点から分析をくわえていること。博士は賢明にも両者の相違に関して、概念的な議論に深く立ち入ることはないが、端的に言えば、パトロネジがパトロンとクリエンスの上下関係を明確に示す一方で、ホスピティウムにおいては、実態はどうであれ、当事者間の上下関係が曖昧なまま残されている、と考えてよいであろう。また、もっとも濃密な人的関係として、婚姻・血縁関係が重視されていることは、単純なようではあるが、実に重要な指摘であろう。次に注目すべきは、ローマをも含めたイタリア半島各地の伝統、慣習の相違に注意を払いながらも、エリート間の人的関係に焦点をあてることで、当該時期のイタリア社会・政治を動かした全体的傾向を読み取ろうとしていること。ローマ期イタリアが、一枚岩的でない他文化地域であったことはつとに知られているが、そうしたなかでも、同盟市戦争という多くの共同体を巻き込んだ「内紛」へといたる力学を読み取ろうとする研究の方向性は、非常に興味深い。最後の注目点は、人的関係という時にきわめて曖昧とした議論に陥りやすいテーマを、常に具体的、物理的側面から補強しているという点である。例えば、ホスピティウム涵養の場としての貴族の邸宅、主要街道沿いの農場、ホラティウスの旅行、植民市の建設、イタリア都市の公共建築物、ナポリ湾岸の別荘地帯、そして婚姻関係。博士の議論は、これらのきわめて具体的な「場」をめぐるおこなわれるために、検討の中心であるエリート間の人的関係が、最終的にイタリア半島という景観のなかに可視的に位置付けられていくことになるのである。

本論文の訳出にあたっては、直接パターンソン博士にお会いし、訳者の理解不足を補うことができた。しかし、訳出の誤りがあるとすれば、言うまでもなくそれはすべて訳者の責任である。また、訳文中の [ ] は訳者による補いを示している。最後に、本論文の日本語訳出を快諾くださり、また訳者自身の研究に折に触れ貴重なアドバイスをくださるパターンソン博士に、感謝の念を捧げたいと思います。

---

This is a translation into Japanese of the article by Dr. John R. Patterson, 'The Relationship of the Italian Ruling Classes with Rome: Friendship, Family Relations and Their Consequences'. It was first presented at a conference in Dresden and then published in the following book:

Martin Jehne & Rene Pfeilschifter eds., *Herrschaft ohne Integration? Rom und Italien in republikanischer Zeit*, Verlag Antike/Frankfurt am Main, 2006.

I would like to thank the editors and publishers of the above mentioned book for permission to publish the Japanese translation of Dr. Patterson's article.

Takashi Minamikawa, Editor of *the Kyoto Journal of Ancient History*